

書評 『身近な水の環境科学 第2版』 日本陸水学会東海支部会（編）

珪藻のような水中に生育する生物の生態（いきざま）を研究するとき、水の物理化学的性質の知識は欠かせない。そのため、私の世代以上の珪藻研究者の多くは陸水学や海洋学のバックグラウンドを持っていた人が多いように思う。

最近では研究分野の細分化が進んだこと、そもそも珪藻の環境応答に関わる生態研究者が絶滅状態にあることもあり、珪藻学会の発表の中で、水の物理化学的パラメータや生物相互作用に関係した発表を聞くことがほとんどなくなってしまった。

一方で、水環境問題は解決されておらず、珪藻研究者がその解決に関わる機会が今後拡大すると考えられる。水環境に関わる様々な知識と環境問題についての概略を知るための日本語の入門書として本書はお薦めできる。

実際に水環境を測定する際には、姉妹本の『身近な水の環境科学 [実習・測定編]: 自然の仕組みを調べるために』も参考になるだろう。

本書は、大学の教養の教科書に用いることを念頭に幅広く解説している。そのため、理解度を確認するための章末問題も含まれている。本書を利用することで水環境の幅広い知識を得て、水環境問題に挑戦する珪藻研究者が出現することを期待したい。

購入判断の参考のため、目次を下記に記しておく。

目次：

- 1 気候変動と陸水の環境科学
 - 1.1 気候変動と地球環境問題
 - 1.2 気候変動が陸水環境に及ぼす影響
- 2 陸水の基礎知識
 - 2.1 流域と河川の構造
 - 2.2 水の循環
 - 2.3 水質指標と水質を決める因子
 - 2.4 陸水の生態系
- 3 源流域と河川上流域
 - 3.1 上流域の地質、地形
 - 3.2 森林域における水・物質移動
 - 3.3 上流域の生態系
 - 3.4 ダム
- 4 河川中流域
 - 4.1 中流域の地形、景観の特徴
 - 4.2 中流域の生態系
 - 4.3 中流域の利水と水質変化
- 5 湖沼
 - 5.1 湖沼の成り立ち
 - 5.2 湖沼内の環境
 - 5.3 湖沼沿岸帯
 - 5.4 酸性雨と湖沼—解決された地球環境問題
- 6 陸水環境としての水田
 - 6.1 水田の水利用
 - 6.2 水田の物質循環
 - 6.3 水田の生物多様性
- 7 湧水・地下水
 - 7.1 水の湧き出る場所
 - 7.2 湧水湿地の生物相
 - 7.3 地下水の世界
- 8 河川下流域
 - 8.1 河口域の水環境
 - 8.2 干潟の環境
 - 8.3 内湾の生物多様性—貝類を指標として
- 9 陸水が支える都市
 - 9.1 都市の陸水
 - 9.2 都市の水利用
 - 9.3 都市で利用された水の行方
- 10 陸水と災害
 - 10.1 災害発生メカニズム
 - 10.2 流域内で発生する水災害
 - 10.3 災害と生物相
- 11 陸水域保全と管理
 - 11.1 河川法
 - 11.2 環境基本法・環境基準
 - 11.3 環境影響評価
 - 11.4 内水面漁場管理
 - 11.5 市民参加型保全活動



朝倉書店 発行 A5判 / 168ページ 定価 2,860円
 刊行日: 2022年04月05日 ISBN: 978-4-254-18062-6
 C3040